

芥川だより

発行日 * 2025年7月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

何かが違ってきた



路上に立ち交通誘導の警備員を始めて4年近くになる。最近、妙に新人に対して心が苛立つことが多くなってきた。年齢が高齢化し体力的・精神的に無理だと感じる人が多くなってきたからだ。80才にもなれば生きていだけで大変なのに、危険な路上で長時間立ち尽くす警備の仕事は元気な人でなければ酷なのだ。

ヨチヨチ歩きしか出来ない人や話を通じにくい人など、よくも警備の仕事を選んだなあと感心するが、当人に聞くと、この歳で仕事があるのは、ここだけなんだと言う。定年まで働き、なお過酷な仕事につかなければならない。聞けば聞くほど、やむを得ない事情を感じる。

高齢者がすがりつくブラック企業とは、天気まかせの日雇い、人の出入りの激しいところだが希望者は次から次へと来る。仕事出来る奴は、条件の良い会社に移り、行き場のない人ばかりが残る。最低賃金すれすれの日当で暮らしていかなければいけない。そんな中でも、みんなが言うことは「交通費は出してほしい」自宅から現場へ行くには、交通費がいる。平均すれば1000円位になる。その半分の500円を出してほしい。

私は、労働組合を作り会社と交渉すればと思ひ労働組合の相談口に電話した。担当者は、「組合費の平均は月4000円位だから、500円を貰う為に4000円払いますかね。組合の維持費はすべて組合員からのお金でしていますから、仮に組合を作っても維持が出来ない。」と言って電話を切った。私は、自分の無知を恥じた。組合も企業と同じように金が無ければ維持できない。じゃあ、弱者である高齢者の労働者は何も言わずにただ仕事があるだけでありがたいと思つて暮らしていかなければいけないのか。

私が想像していたよりも生活に困っている高齢者は増えている。子供たちに頼れる時代でもない、自分たちで何とかしなければならぬ。そうした時に、一人では無力だ、周りの人たちと助け合つて暮らしたいが、すぐには出来ない。すぐに、一人でも出来ることは限られる。突き詰めて考えると選挙の投票が最も手っ取り早い方法だ。

死をめぐるあれやこれ(127)

石川 吾郎

今年の梅雨は異常な早さで明けて、それとも連日真夏の猛暑が続いている。これからの三ヶ月ほど生命に危険な猛暑が続くと思うと、やりきれない。猛暑の上に、午後になると毎日のようにゲリラ豪雨。つまりは熱帯スコールに見舞われる。聞けばヨーロッパも異常な暑さに襲われているという。やはり地球温暖化によるものか。◆二酸化炭素排出量が最大の米国と中国のトップがともにそうだったことに無関心のようだ。なにせ世界に専制政治が横行している。この気候は恐竜が世界を支配していた中生代化しているとも想像してしまう。そういえば、恐竜界の頂点であるティラノサウルスは日本語では「暴君竜」の意味で、例の二人の支配者を彷彿とする。◆この夏はひたすらエアコンの効いた屋内にとどまり、自然とは隔絶した夏を過ごすことになりそう。天の川を見たり、川遊びをしたりした子供の頃の、身体にやさしい夏が懐かしい。◆今は参院選挙の最中だが、物価高が止まらない。もう少しマシな政治となるように慎重に一票を投じたい。今の日本の経済状況では、国民にいきわたる財政拡大の政策が正しい、と私は考えている。

芥川だより二三号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム127	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 136	坂本一光	2
哲学者の時事放談 85	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 92	下村嘉明	4
ボケ老人の雑話 15	明石幸次郎	5
オクラの山たより 106	因了生	6
隠された歴史 81	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草 85	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (136)

坂本一光

◆語り継ぐ八月

八月には八月の意味があると称して、かつて「芥川だより」に次のようなことを書いた(2018.7.1, No.138)。

二〇〇二年八月三日に、伊藤信吉という九十五歳の詩人が亡くなりました。同郷・群馬県の詩人のことを書いた『萩原

朔太郎研究』などで知られた人です。七十歳のとき、およそ四十年ぶりに『天下末年』という詩集を出しています(新日本出版社、一九七七年)。そのなかに、「八月は 魔の月」とうたった詩があります。

どうして、八月は魔の月なのか。この百年の歴史を紐解いてみると、一九一〇年(明治四十三年)には、韓国併合に関する日韓条約調印がありました。一九一四年(大正三年)、日本はドイツに宣戦布告し、第一次世界大戦に参戦します。一九一八年(大正七年)、政府は、ロシア革命に干渉するシベリア出兵を宣言。一九四五年(昭和二十年)には、広島と長崎への米国による原子爆弾投下があり、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏しました。これらはすべて、八月の出来事でした。詩の最後に、こう詠っています。

今年めぐってきた八月。
来年めぐって来る八月。

それは魔の日が二度とあつてはならぬと

八月を語り継ぐ
そのための
八月である。

どうして詩の最後しか紹介していないのか、記憶にない。全文が気になり、古本で買った「天下末年」をさがしたが、どこに仕舞い込んだか行方知れず。「伊藤

信吉 八月は魔の月」を検索するとユーチューブに詩の朗読動画があった。以下に全文を掘り起こす。原詩がどこで改行しているか、よくわからないままの引用である。

語り継ぐ八月

伊藤信吉

戦争というもんは 十年ごとにきつとや
つてくる。

三度目の戦争体験のはじまった日におじいさんは

夕飯時の吊ランプの下で
幼い私に
そうおしえた。

日清戦争 一九八四、五年
(明治二十七、八)

日露戦争 一九〇四、五年
(明治三十七、八)

第一次世界戦争 一九一四年(大正三
参戦。

杉の葉の蚊いぶし。
農家の夏の夕暮れは

蚊群が裏の竹ヤブで
ワーンと唸っていた。

泥によこれた
手足を

蚊にさされながら聞いた…。

その話を日本帝国主義侵略の歴史に辿れば

戦争周期の足跡がくつきりと浮かんで

くる。
十歳の子供が
二十歳の壮丁にそだつ
そういう十年だ。

富国強兵。
国民皆兵。

国定教科書の軍国教育が
戦争愛国の観念を叩きこんで

徴兵検査の日を迎えさせる。
そういう十年だ。

そいつはまた軍事権力・兵器産業が充実
して

うずうずして
戦争したくなる

そういう十年だ。
蚊いぶしを焚いた。

八月は魔の月。
第一次世界戦争参戦布告の
八月二十三日。

シベリア出兵宣言の一九一八年(大正七
八月二日。

そして戦争経験二度の私が孫たちに語り
継ぐ魔の日は

百度千度言って言い足らぬ
一九四五年八月六日・九日の原爆のその
日だ。

それは十年周期を超えて
三、六五〇日をべったりと戦争に押し包
んだ

その果ての
魔の月だ。

今年めぐってきた八月。

来年めぐって来る八月。

それは魔の日が二度とあつてはならぬと

八月を語り継ぐ

そのための

八月である。

今や八月に限らない。私たちは、毎日、毎月が魔の日、魔の月になりかねない世界に暮らしている。

(かたちは心であり、心はかたちになる ■大分の素老人)

「哲学命い」の時事放談(85)

祖蔵 哲

「かのように」の哲学

今年の梅雨は史上最短、そして早期に終わった。そしていきなりの真夏日。異常気象はもう慣れてしまっているが、ここまでのになると流石に異常というより異次元。何が起るか予想がつかない。それに乗じてか、今年の7月5日に日本で大地震が起きるとした、ある日本の小説がアジアで話題になっている。その影

響は訪日旅行者の減少として現れてきており問題となっている。気象庁が対策に乗り出し。現代科学では地震の発生日は特定できず、言説はデマや偽情報の類であると一蹴した。しかし、現実には最近、日本各地で地震は頻発している。南方のトカラ列島では島外避難も開始された。そのような不安が現実の社会にも異常現象を引き起こすのだろうか。

さて、異常といえれば自然界のことだけでなく人間の世界でも頻繁に起きている。先月21日、米国がイランの核施設を大型の特殊貫通弾で空爆した。トランプ氏が攻撃の判断時期を「2週間以内」と表明してから、わずか2日後だった。「国際法違反」は明確であるが世界はこの蛮行を止められない。さらに彼はこの後、この空爆を第2次世界大戦の終結につながった広島と長崎への原爆投下になぞらえる発言をした。「あの一撃で戦争は終わった、広島は使いたくないし、長崎の例も使いたくないが、本質的には同じだ」と。驚くべき異常であるが、アメリカ全体の政治思想が本質的に表れたものだろう。

今年には第二次世界大戦後80年。平和の意義はすっかり変わってしまった「かのように」である。何がどう変わったのか。今月は少し回りくどくなるが、この「かのように」をキーワードで哲学してみよう。

(1) 森鷗外「かのように」

「かのように」といえば明治の文豪、森鷗外の短編小説が、哲学者の間では有名である。まだ読んだことがない人が多いだろう。ネタバレになるがそのあらすじを言おう。

主人公、五条秀麿は、天皇家と関係ある貴族の生まれだ。いずれ父の後を継いで子爵となる。大学で歴史学を学んでいたが、勉強しすぎて神経衰弱寸前になる。父親は心配してドイツに留学をさせる。彼は留学先のベルリンで神学者が国王の政治相談役として活躍しているのを見て驚く。西欧社会での政治、宗教、学問のそれぞれの役割に日本との大きな違いを見出した。特に神話と歴史の関係については大いなる示唆を得た。

健康を回復して帰国後、秀麿は父との「天皇神格化論争」の結果再び健康を害する。ある日、心配した友人が訪ねてくると、彼は、日本は神を崇めその分身としての天皇を崇めているがこれは存在するかわからないものを崇めていることになる、と言う。友人が同意すると、「かのように(アルスオプ)」の哲学を修めないといけないと言って苦笑する。この小説のテーマは神話と歴史の関係である。特に神話をどのように歴史記述に取り入れるかという問題が中心だ。しかし、秀麿は、学問としては神話を事実として扱うことの矛盾や、それが世間の理解を得られないことに苦悩する。

(2) 鷗外の時代

この小説は、1912年に、山形有朋から危険思想対策としての提案を求められて書き記したものらしい。1889年、明治政府は大日本帝国憲法により主権が天皇にあるとした。しかしその後、民権運動の高揚に乗って、1910年に大逆事件が発生した。明治天皇暗殺を計画したとして、幸徳秋水初め、無政府主義者や社会主義者が大量に検挙され、処刑された。明治維新により日本は突然「天皇は神である」として政治を行ってきたが、この時期は天皇制国家における権威の衰退が著しい時代であった。そのような中で鷗外の分身、主人公秀麿は、ドイツ留学で学んだ『かのように』の哲学に自分のよって立つ立場を見出す。この哲学は、人間は世界の根源的現実を知ることができないため、仮説を立てて世界を理解しようとする考え方である。

秀麿は、最初に道徳的・政治的価値の相対性を論証する。しかし彼は、いかなる価値も絶対ではないとしても、社会がなんらかの価値体系を必要としている以上伝統的な真理や慣習が絶対的な真理である「かのように」振る舞うしかないと考えた。日本の国体は、「天孫降臨」と「万世一系の天皇」という古代の記紀神話に立脚している。秀麿は、それが歴史的事実ではなく神話であることを知りつつも、あたかも事実であるかのように振る舞う

のである。これが妥協折衷の立場であることはいうまでもない。鵬外は「御国柄」維持という至上命令のもとに、舵をとる人間として折衷主義を考えたわけであった。

この作品は、明治時代から大正時代にかけての歴史観の変化や、知識人の抱える葛藤を描いている。この時期は近代的な歴史認識と、伝統的な神話的世界観との間の矛盾を浮き彫りになってきているが、むしろ昭和に入ってからの方が極端になって行く。1935年の「天皇機関説問題」などはその実例である。このような問題は戦後80年現在になっても連綿として日本の根底に流れている。「かのように」という理解の両義性のせいであらうか。

(3) 実用的哲学「かのように」

秀麿が学んだ「かのように」の哲学を提唱したのはドイツの哲学者ファイヒンガーである。かれはカントなどの影響のもとに、プラグマティズム的に解釈された独自の仮構主義を展開した。言わば「実用的観念論」である。彼によると、思考と認識は生活目的に到達するための手段であるが、直接的な体験の現実を純粹に理論的に認識することはできず、現実との一致という意味での真理を実現することはできない。知識が実際上の価値をもつかどうか重要であり、論理的に矛盾を犯していても、それは生活のうえ

で重要な目的を果たしている。知識とは、それが真である「かのようにである」ことにほかならず、「われわれの世界の表象形態は仮構の巨大な織物であり、矛盾に満ちている」と唱えた。

確かに「かのように」の哲学はドイツ観念論としてカントからはじまった。しかし、ファイヒンガーはあくまでそれを「実用性」や「効用性」に求め、真理としての「実在」は想定しなかった。しかし、カントはこれとは異なる。カントは人間の実践的行為、道徳的行為においてはそれが「実在」すると考える。これがかれの「実践理性」である。その過程は「かのように」であるが、それが「理念」として「統制原理」、つまり「実在」に向かう原理になるという。

(4) 相対的平和「かのように」

現代の世界に目を向けよう。「平和」という理念の实在が危ぶまれている。戦後、世界は「平和」という理念のもとに再統合しようと試みてきた。しかし、それはこのファイヒンガー「かのように」
|| 実用的観念論の立場であった。その結果、世界は絶対的平和を目指すのを放棄し「相対的平和」に向かっている。トランプは圧倒的軍事力を背景に「取引」をし、力による支配下にある平和を世界に求めている。
真の平和、絶対的平和は先に述べた、カントの実践理性による「統制原理」に

よるものでなければならぬ。つまり、「かのように」としての「平和」は折衷的な実用的方法ではなく、実在的方法で達成するということだ。各自が「実在」するという信念の元に「共創」すること、それがカントの「統制的原理」である。

以上、今月は易しいようで少し難しい哲学論議になったが、そもそも現在の国連憲章の平和事項はカントの「恒久平和論」の思想に基づいているというのは事実である。トランプに限らず世界のリーダーはもう少し「哲学」すべきなのは、実利実用ではなく。

今月号も慌ただしく脱稿前になって驚くべきニュースが飛び込んできた。トランプ大統領がノーベル平和賞に推薦されたというのである。さらに驚くのはその推薦者がイスラエルの首相である。ブラックジョークとしか言いようがない。しかし、彼らによって何万もの不条理な死傷者が現実に出ている。異常な冗談では済まされない。

大塚典駈道 (92)

下村 嘉明

体験型人間学 42

元経理部長という77歳の身なり、身振りを見て彼の言う話を疑いながらも、何とかして彼の交通誘導を良くしようとする。幾度も注意するのだが、まったく理解できないのか、する気がないのか、認知症なのかかわからないが、彼は警備員として工事現場に立つのは無理だと判断して会社に報告した。それ以後、彼は私の現場に姿を表すことはなくなった。

新築の戸建て住宅の現場に来た警備員は出会うなり、「私は、前回一緒にさせてもらいあなたのやり方に感心しました。是非また一緒に仕事したいと思ってました。今日は、よろしくお願いいたします。」と言ってきたので、「こちらこそよろしく」と返事しながら、仕事の配置や休憩の打ち合わせをおこなった。

彼の話を聞くと意外な話を聞くことになった。彼は私より一つ年上で定時制の工業高校を卒業し、大手企業に就職し工事現場で定年まで働き、退職金は3500万円もらい、競艇場通い、女友達も2人いて知らぬ間に金を使い果たし、気が付けば100万円だけになっていて、これではいかんと思ひ働くことにしたという。話し方や体形も細身に運動神経もよさそうだが若々しく思える人だった。こんな人ばかりだと、仕事がやり易い。「続く」

ボケ老人の雑記(その15)

明石 幸次郎

先月号に書きましたが、バルコニー型人間(人を応援し、引き立て、励まし、成長を支援する。人を肯定し、成果を上げることが期待し、上手くいけば、その成功を称える人)として「いのちの電話」のボランティアをして「悩み、苦しみ、上手くいかなくしんどい、死んでしまいたい」などの声を聴いて、その人に寄り添い、共感し、ざわざわする気持ちを少しでも軽く出来て、その人が一歩でも生きようと前に踏み出す「ちから」になれたらという想いでやっています。

先日、30歳代の女性から掛かって来た電話を取りました。「私は、色々な悩みを抱えて苦しんでますが、中々、その悩みを言葉にすることが出来ません」と言われ「そうですか、言葉に出して話をすることが出来ない悩みなんですね」と暫く沈黙が続く。「あのーやはりー言葉にできません! うんー」「うんー。そういう苦しいお気持ちを言葉には出すことが、今は出来ない状態なんですね?」又、沈黙が続く。「やはり、私、今、言えませんが、失礼します」「そうですか。又、悩みが言葉に出来て、それを、お話ししたいと思われたら是非、ここの電話に掛けてきて下さいね」と答えると「はい。分かりました」と何か戸惑いながら、弱々弱わしい声で応えて電話がきました。

切れた後、あれ・・・と、ここに電話を掛けてくる人で、このような悩みを言葉、言語化することが出来ないという人からの電話を受けたのは私にとってこの10年間で初めてなので、対応に戸惑っていました。沈黙の後で彼女が何かを喋ってくれるのを待ちましたが、出て来たのは「言葉にやはり出来ません」ということでした。

私は、少しショックを受けました、もし私以外の人が電話に出ておれば、彼女は少しでも戸惑いながら、断片的にでも自分の悩みを喋れたのではないかと、いう事です。

電話の相談は聴き手の声の音色、トーン、息使い、声のリズム、それと、なんとも言えない間のようなものがあり、掛け手からすれば、このような声だけで、この人はどういう人で自分を理解し、共感し、寄り添ってくれる人か、又、喋りやすい人かなどを判断して言葉にして話をしていきます。それが冒頭から言葉に出来ないと言われ、電話を切られたのです。それは、自分の声は、掛け手に取って深刻な話をしづらかったのかなあ?と。又、言葉に出来ない悩みとは? どういう状態であるのかと疑問に思いました。

それで、帰宅する途中に図書館に寄って、「言葉に出来ない悩み」を本、雑誌などで調べたら、松本俊彦(精神科医)さんが、雑誌「世界4月号」に寄稿した記事に私の疑問に答えるようなのがありました。それは、今、若者の薬物中毒が問題になり厚労省がその対策と為に「OD(オーバードーズ)よりSD(相談)しよう!」という啓発の動画を公開しましたが、これが大変な批判を受けて中止したようです。問題は、相談しようと言っても誰に、何処に相談するのかと言うこともありますが、そもそも、オーバードーズで悩んでいる若者は悩みが複雑でそれを言葉に出来ない(言語化する力)人も多いし、それに、「相談してね」と言われると、傷つき、自尊心を挫かれ、お前は弱いと言われたように受け取ってしまう人たちが多いと言うことです。相談とは、相談する人と相談された人との何かの力関係が生じがちで、親しい人への相談はいざ知らず、オーバードーズなどで悩む若者は複雑な悩みを抱えていて、それを言葉に出して相談者に話をするとは、中々、ハードルが高いということです。

学校でのいじめの問題、不登校の問題など悩める子供にとって周りには、親、先生、友達、スクールカウンセラーなどが、話を聞いてくれる人がいるんですが、子供が自分で問題を言葉にして話をするには中々、難しく、相談しないで問題を一人で抱えて苦しんでしまうケースも多いと言うことです。 どうすれば良いのか? は、松本さんは、子供でも成人に対しても、「何か悩んでいることがあるの? 相談して?」という問いかけではなく、何気ない言葉で「ちょっとしんどそうやね、どこが悪いの?」とか、あいさつで「今日は暑いね?」などと軽い声かけをして、悩みを抱えている人を感じ取りわたしは、貴方の傍に居て、敵ではないよ、あなたの仲間なんよ、ということを手伝い伝えるようなところから入っていくのが大事だと言われています。成人でも問題が複雑であれば、これをどう解決したらよいか、どういう言葉に表して、相手にそれを伝え、悩みを共感、理解してくれるかを表現する作業は、難しいものですと言われ、大事なのは、普段のあいさつとか軽い雑談をする事であり、それが人間関係を円滑にしたり、その延長として悩みの相談にも繋がっていったりするということです。

この雑談の効用ですが、17世紀に生まれたロンドンのコーヒーハウスなどは雑談をするたまり場として生まれ、そこから情報の交換、発信など、市民の社会、政治、ビジネスの情報交換の場となって発展したようです。

そう言えば、「いのちの電話」に何度も電話される人が多くおられるが、これらの人は大概が雑談的な内容の悩みのお話です。話を聞いてくれる人がいないか、いても、煙たがられて真剣に聞いてくれない孤独な人が多いようです。身近に雑談をする人がいないのです。それに自分の悩みを整理して、言葉にしてこちらの聴

き手に伝えて共感して何等かの悩みの解決の手掛かりをつかみたいという人は少ないようです。

世の中には、自分の話を兎に角、口を挟まず聞いて欲しい、雑談をしたいが手がいない、悩みを受け止めて共感してほしい、という人が多くいて、それを匿名で電話を通して、その場だけの話をして、なんらかの心のよりどころを掴んで、又、電話をしてくる。このような、寂しい、こころの病がある、誰かと話をして繋がっていたいという人達には“いのちの電話”は目に見えないが有用な“場”になっているのではないだろうか。言葉に出来ない悩み”を抱えた彼女も悩みを雑談的に話せば、少しでも悩みの内容が整理でき、解決の方向付けになるかも知れないので、是非、気軽に？電話をして来てほしいと願っております。

オクラの山たより (106)

困り生

一

少しずつではありますが樋口一葉は小説家として飛翔していく道を確実に歩みつつあった一八九三(明治二十六年)年の

春、樋口家の家計はいよいよ苦しくなっていました。小説を書いた原稿料は一品について樋口家一か月の生活費に匹敵する十円程度であることから、一葉の原稿料で何とかしのげそうなものですが、一葉がきわめて遅筆であることと原稿料収入が不定期であることで、これを家計の柱とするわけにはいきませんでした。つまりところ知人への借金と質屋通いの生活でした。一八九二(明治二十五年)年末は特に厳しい状況に追い込まれていました。日記「よもぎふにつ記」十二月二十四日の記事です。

(気に) かけじとおもへどげに「貧は諸道の妨げ」なりけりな。すでに今年も師走の廿四日になりぬ。……此の月の初め三枝氏より借りたる金の、今ははや残り少なにて奥田の利金(借金の利子)を払はば誠に手払ひになりぬべし。餅は何としてつくべき、家賃は何とせん。「暁月夜」の原稿料もいまだ手に入らず。ほかに一銭も入金のアてもなきを……

「一銭も入金のアてもなき」という状態だったのですが、四日後の二十八日に雑誌「都の花」に掲載される「暁月夜」の原稿料十一円四十銭を受け取って、一葉は安堵します。年が明けても樋口家の家計は好転することなく一八九三(明治二十六年)年三月十五日の日記に次のよう

な記述があります。

昨日より、家の内に金といふもの一銭もなし。母君これを苦しみて姉君(一葉の姉の久保木ふじ子のこと)のもとより二十銭借りくる。

家に一銭もないことを気に病んだ母親のたきは一葉の姉のふじ子に二十銭(今の四千円ほど)を借りています。しかし、母親のたきに二十銭のお金を貸した姉のふじ子はこの月初めに樋口家からいくばくかのお金を借りに來ています。ですから、姉のふじ子が嫁いだ久保木家も樋口家と同様に火の車状態だったのでしよう。そこをあえて母親のたきは二十銭のお金を借りています。樋口家の窮状を推して知るべし、です。

一葉はいつになったら家計を助けるほどに稼げるようになるのか。一葉のあまりの遅筆にいらだつたたきの言葉が三月三十日の日記に書かれています。少し長いですが、引用します。

我が家貧困日増しにせまりて、今はいづくより金借り出すべき道もなし。母君はただ迫りに迫りて、我が著作の速やかならんことをの給ひ、「いでや、いかに力を尽くすとも、世に買ひ手なき時はいかがはせん。ここよりもかしこよりもただ求めに求むるを、とかく引きしるひて

(「延び延びにのぼして」の意) 世に出さぬこそあやしけれ。誰も初めより名文名作のあるべきならねば、よしいささか心に入らぬふし有りとも、そは忍ばねばならずかし。たとへ十年の後に高名の道ありとも、それまでの衣食なくてやは過ぐす。かかるわびしき目見んよりは、よし十円の取りの小役人にまれ、方禪(かたぢすき 離さぬ小商人(こあきんど)にまれ、身のよすがが定まれば憂きことは知らじを」などの給ひなすこと、いと多し。

こうしたたきの言葉に続けて一葉は次のように書いています

不孝の子ならじとは日夜に思へども、猶(なお)かかるかた(私の気持ち)の(母親の)御心にも入らずして、かくわずらはしげにの給ふこと常の様なり。

母親から毎日浴びせかけられる「小説の注文があちこちからきているというのに何て書くのが遅いの! 注文にこたえて、たとえ自分の意に添わなくてもさつさと書いておしまい。十年後に著名な作家になったって何になる。それまで衣食がなくてどうやって暮らすというんだい。金銭に事欠くこんな苦しい生活を続けるよりは、どんな仕事であれ定収入が

あれば心配ごとなんかはなくなっちゃうんだよ」という小言、小言、そして小言です。

普段から頭痛、肩こりに苦しめられていた一葉は「私の気持ちも知らないで」と悩みつつも母親の言葉とは裏腹に自分が納得できる作品づくりに腐心してしました。後半生は赤貧生活の中で過ごしたといつてもよい一葉ですが、家計の最も苦しいこの時期、彼女は作家としての新たな転換期「ターニング・ポイント」にさしかかりつつありました。

二

明治二十五年の末に「都の花」に発表した「暁月夜」は経済的に追い詰められていた樋口家の窮地を救っただけではなく、一葉にとつても大きな意味を持つ作品です。

半井桃水への一葉の一方的な、そしてほのかな思慕もありながらも桃水の指導を離れたことよつて一葉の作品におのずと変化が生まれたことは一般論としても理解しやすいことでしょう。ただ、こゝとはそれほど単純ではなく、「闇桜」をはじめとして桃水の指導の下に書かれた初期の作品にも桃水との出会い以前に形成された一葉独自ともいえる一種王朝文学風の小説世界は存在し続けましたし、桃水との離別以後も桃水が指導した趣向中心の創作方法（読者の喜ぶ内容を書く）は一葉の中に生き続けていました。

それが徐々に変化し始めるのが、明治二十五年後半から明治二十六年にかけての頃でした。こうした時期に一葉にはどうしても乗り越えねばならない問題がありました。先回述べた「真情」の問題です。

一葉の小説化への出発点は「衣食のため」でした。しかし「書く私」という自覚が生まれるにつれて「作家の内的な必然」と「衣食のために書く」ということが矛盾したものと抑えがたく一葉の内部に沸き起こってきます。そこで一葉は「真情に訴え真情をうつす」という姿勢をとることでひとまず両者の間に折り合いをつけ、「書く私」の内的な欲求をなだめすかそうとします。しかし、そもそも「真情」とは何なのか。そして、その「真情」の主体は誰なのか、ということに一葉は、この時期まだ思い及んでいませんでした。したがつて語り手と登場人物との境は曖昧になり、「片恋」や「心中」という古典的な既成の物語の枠組みに依拠してしまつたのです。

このような語りの限界、つまり既成の物語の枠組の依拠することの限界に一葉が思い当たつたのではないかとされる作品が雑誌「都の花」に掲載された「暁月夜」（明治26年2月）でした。

三

文学書生の森野敏（さとし）は従三位という位階を持つ華族香山家の美しき令嬢

一重（ひとえ）の「一生ひとり住みの願ひ」を聞きつけ、彼女を一目見るや恋するようになり、彼女を救えるのは自分だけだと妄想をたくましくしたあげく、庭男に身をやつして香山家に住み込んでしまいます。敏は一重を継母にいいめられている悲劇のヒロインに、そして自分を一重を救い出すヒーローへと勝手に仕立て上げていくのですが、こうした敏の妄想は自己物語化の過程に他者としての一重は存在しません。しかし、一重が「ひとり住み」への強い思いに至つたのは一重を産んだ母と使用人との身分違いの恋（その時、十六歳であつた母は子を産むや亡くなり、使用人も後追い自殺をした）の物語の呪縛によるものなのでした。はからずも敏は一重の母の過去の物語を再現していたのです。

敏は自分が「片恋」の主人公を演じているはずだったので、一重にはまた別の物語があつたのです。自分は母と使用人の身分違いの恋の結果であり、だからこそ自分はそんな恋の物語を決してくり返してはならない。つまり一重の物語自体もまた彼女の母の物語に依拠したものであつたといえるわけです。このように「暁月夜」には幾重に重なつた物語が存在していて、最終的にそれらをどう作品の中で整理するか、作者たる一葉はついに最後まで書ききることができませんでした。「暁月夜」の最後の一行は

これより姫はいかになりけん、さても敏はいかになりけん。つれなく見えて、「暁ばかり」と叫（うめ）きけんか、知らず。

となつていて「これより姫はいかになりけん、さても敏はいかになりけん。……知らず」と語り手は語ることに自体を放棄してしまつています。

敏の一重への恋に始まる彼の勝手な妄想によつて生ずる物語の呪縛（自らの妄想によつて自分自身を縛りつける）。また、一重自身が語る彼女を縛りつけている母と使用人のなさぬ恋の悲劇の物語の呪縛。「暁月夜」は複数の語り手による「物語の呪縛」を書こうとした作品といえるかもしれません。一つ一つの物語は既成の物語の枠組通りのものです。それが幾重にも重なつたとき、執筆当時の一葉にはもはや收拾がつかなくなつたかみえます。既成の物語に依拠して彼女の書こうとする世界はそろそろ限界となつていたのです。そのため物語は最後まで語られることはなく、末尾は一葉特有とも言いうる「臚化法（結末をはつきりと出さず、余韻を持たせて終わる書き方。一葉の初期作品には多くみられる）」によつて作品が終わつていきます。

では、既成の作品によらずにどう小説を書くのか。すでに「うもれ木」で一葉はその試みをしています、それは当時

の批評にある通り多分に幸田露伴の影響を受けたものです。初期作品から脱して自分自身によるオリジナルの作品を書かねば、という思いが「暁月夜」を完成後の一葉には出て来たに違いありません。

「奇蹟の十四ヶ月」のスタートとなる「大つごもり」へと確かに向う道標のような作品が「暁月夜」の翌月に「文学界」第三号で発表された「雪の日」です

四

「雪の日」は樋口一葉の「文学界」デビュー作で掲載は「文学界」第三号（明治二十六年三月発行）になりましたが、もともとは萩の舎の門人仲間である三宅（旧姓は田辺）花圃を通じて「文学界」同人の星野天知らから明治二十五年末に創刊号への寄稿を促されたものです。十二月二十六日のことです。「家に一銭もない」と嘆いたときの原稿依頼です。家計を支える柱たる戸主の一葉です。この依頼になんとしてもこたえるために一葉はひたすら努力をします。明治二十五年十二月三十日の日記に次のようにあります。

廿九、廿の両日、必死と著作（「雪の日」の制作）に従事す。暁がたしばしまどろむのみにて、一意に三十一日まで間に合わせんとするほどいと苦し。三十日には上野の伯父君歳暮にとて参られぬ。一日筆取る

こと叶わずして暮らしき。其の夜十時まで燈火にありしが、国子（一葉の妹）しばしば我を諫めて「名譽もほまれも命ありてにこそ。かくまで脳を使ひ、心を勞して煩ひ給はば何とかすべき。見る目もいと苦しきに、何卒これは断りて、もはや今宵は休む給へ」と繰り返しいきむ。「げにそれも道理なり」とて筆をさし置けば、心（身）ともに疲れてにはかに眠くさへなりぬ。

翌日、一葉は田三宅花圃に「もう、無理」と断りのがきを出します。しかし、翌年の一月八日、年始訪れた一葉は花圃に「『文学界』の小説、ぜひ出し給はれ。……間に合わずは二号にてもよし」と強くすすめられ、「雪の日」を一月二十日に完成させます。

小説「雪の日」は一八九二（明治二十五年）二月四日の雪の日に桃水宅を訪問した際の一葉の思い出と関連づけてとらえられることが多い作品でした。

この日、書きかけの小説を見せるために桃水を訪ねた一葉は桃水が手ずからこしらえた「しるこ」を食べ、様々なことを語り合い、思い出深い一日を過ごします。そして、降りしきる雪の中、一葉は帰り道を急いだのでした。

桃水との別離後、一葉は自身の日記の中で、この「雪の日」を特別な日として幾度も振り返り記しています。たとえば

明治二十六年二月二十七日の日記です。

昼頃より雪降り出づ。万感ここに生じて、散乱の心ことに静めがたし。我が雪の日をめぐるは、めぐるにはあらでかなしむなりけり。かの火桶をはさみて、物語のどかに、手づから調理し賜はりし汁粉の昔、恋も悟りもかの雪の日なればぞかし。

これを見る限り、確かに二十四年という短い一葉の人生において、この「雪の日」はもつとも思い出に残る一日であったことは間違いありません。ただし、それは時間が経つにつれて恋の自覚の苦悩が広がる中で、しだいに彼女にとつての意味が大きくなっていったのであって、「雪の日」当日の日記はこう結ばれています。

半井うしがもとを出でしは四時ころなりけん。白皚々（はくがいがい）たる雪中、りんりんたる寒気をおかして帰る。なかなかにおもしろし。堀端通り九段の辺り吹きかくる雪に表も向けられ難くて頭巾の上に肩掛けすつぽりとかぶりて折ふし目ばかりさし出すもかし。種々の感情胸に迫りて雪の日といふ小説一篇あまばやの腹稿なる。

ここで「一葉の恋」に過剰な思い入れをするのは間違いです。なによりこの雪の

帰り道で一葉をとらえた「種々の感情」は「雪の日といふ小説を書こう」という思いへとつながり、そこで終わっていません。自らの感情も小説のネタとしてとらえていく。ここに書かれているのは自ら印象深い時間の終わりですらも「小説一篇あまばや」と考える一人の作家なのです。

小説「雪の日」の内容はヒロイン薄井珠が自らの駆け落ちの過去を公開する独白です。この作品の最大の特徴は珠の独白という一人称で語られているということです。これはそれまでの一葉作品にならぬことです。

「我れ」こと薄井珠（うすいたま）は両親亡きあと、たった一人の伯母に大切に育てられてきました。しかし、ある雪の日のこと、降りしきる雪に心迷いがしたのか、十五歳の珠は伯母から固く会うことを止められていた三十三歳の教師桂木のもとへ走ってしまったのです。その当座は恋しさからの駆け落ちでしたが、自分につれなくする夫への愛情もすっかり冷めたいま、すでに亡くなった伯母に謝罪しつつ深い悔恨にうち沈んでいる。これらのことがお珠自身によって語られていきます。

再度、強調しますが、大事なことはこの作品において語りの混乱はまったく見られないという点です。現在の自分と過去の自分とはつきりと分けられており、語られている過去のことは、現在のお珠

の認識によってきちんと整理され意味づけられています。この一人称による語りという方法を採用することによって、一葉は作品の中で語り手がその作品世界をコントロールする力というものをつかんだのではないか。自分の語る世界を語り手である作者がすみずみまで把握して「語られる世界」を操作しうる手段をつかんだ一葉。このことによって一葉はさらに作家として一段高いところへと飛躍していくことができたのです。

思えば、これまで何回か紹介してきた日記の執筆は一葉にとつて一人称が語る物語の作成といつてもいいものでした。日記を書いていく過程で一葉は一人称の語りがひとつひとつのドラマをつむぎだしていけることを気づいていったに違いありません。

この一人称の語り手を採用することにより樋口一葉の小説は初期作品の混乱を脱して近代文学屈指の作家へと成長していくのです。



日本書紀には百済との交流記事が大量に記されていますが、朝鮮半島の高麗時代に編纂された三国史記・百濟本紀には倭との交流記事が極めてわずかしき記されています。私は今まで、百濟本紀は倭との交流の実態を秘匿しているのではないかと考えてきました。しかし、枚方歴史フォーラム検証『古代日本と百濟』（大巧社、2003年）という本によって、今まで私が考えてきた歴史解釈とは全く違う歴史解釈があることを知りました。今回は、『古代日本と百濟』が提起する内容の紹介とともに、そのことによって考えられる百濟、馬韓地域と日本（倭国）との真実の関係を探っていきます。

まず、『古代日本と百濟』の内容をご紹介します。本書は、著名な考古学者である森浩一氏を中心とした日本の歴史学者・考古学者八人と韓国の歴史学者・考古学者二人による歴史フォーラムをまとめたものです。本書は、馬韓土器と百濟土器の出土状況によって、従来百濟との交流と日本書紀に記された史実が、長期間において百濟とは別の馬韓勢力との交流であったのではないかという問題提起をしています。

本書の要点を箇条書きにします。

①いわゆる「クダラ」の土器は三つのグループに分かれる。「百濟典型器種」というのは、ソウルや公州、扶余などの百濟の首都で王陵や王城から出土する器種の総称で、紛れもなく百濟土器である。百濟典型器種以外の大半を占める器種が、最近、馬韓の土器として注目されているが、その内部も二つのグループに分かれる。この二つのグループは日本列島の中で出土する地域や時期が互いに異なるので、それぞれ別の人々が持ち込み、あるいは作り、使っていたと思われる。今までいわゆる「クダラ」の土器と呼んでいた土器は、実は百濟と馬韓の集団A、集団Bという二つの集団が作り、持ち込み、使った土器だということになる。

②馬韓は、栄山江流域を中心に、王仁の渡海よりも百年後の六世紀初頭まで存続しており、百濟にひけをとらない高い文化を達成していたという点を看過してはならない。王仁博士（*応神期に渡来し、千字文と論語を伝えたと言われる）は、百濟の人物であると記紀に記されているが、韓国の文献には王仁博士に関する記録が全く残っておらず、むしろ栄山江流域を基盤に活動したのち、百濟建国以前から成立していた馬韓と倭との密接な交流を通じて倭に渡った人物とみるのが、より合理的な解釈ではないか。

③五世紀初めごろ、朝鮮半島南部からさまざまな集団が西日本の各地にやってくるようになり、中には日本列島に住み着

いた者もいる。馬韓の勢力のうち、集団Aは大阪府の和泉地方で初期須恵器生産にかかわっていたのではないかとされている。それからこのころから馬韓集団B、主に鳥足紋土器を作る集団もやってくるが、新たに渡来した集団Bは、北部九州で初期須恵器を作っていて、その一方大阪府の河内地方にもやってきて、土木工事などにも従事したようである。百濟典型器種が日本列島に登場するのは五世紀後半須恵器のTK33型式ころである。

この時期一時的に登場してまたすぐになくなるとなる。ソウルにあった百濟の都漢城が四七五年に陥落した直後のころにほぼ一致する。

④古墳後期、六世紀には、北部九州という非常に限られた地域にだけ、群集墳の副葬品として集団Bの鳥足紋土器が出土する。新羅土器は六世紀前半まで東日本などに分布していたが、六世紀後半には、これも北九州に分布が限られるようになる。さらに伽耶の中心地、大伽耶の土器も六世紀には九州などで出土する。つまり、六世紀特に後半には北部九州の人びとだけが新羅と大伽耶そして馬韓の集団Bと交流していたことになる。

⑤六世紀の末から、飛鳥時代には、それまでとはまったく交渉の仕方が変わる。鳥足紋土器が見られなくなり、馬韓地域の集団Bと日本列島との交流が追えなくなるのに対して、新羅土器と百濟典型器種が北部九州と畿内にみられるようになる。

る。

⑥『日本書紀』ができた奈良時代の初めには、最後に残っていた百済も滅ぼされ、朝鮮半島は新羅に統一されていた。当時の人が「クダラ」として基本的にイメー
ジしたのは、「クダラ」の子孫を名乗る渡
来人や「クダラ」の名を冠した寺院、宮
都だったはずである。そのような状況で
百済の歴史に「クダラ」の名を与えたの
だから、馬韓の諸集団に関する伝承があ
っても、いっしょくたに「クダラ」の話
に組み込まれてしまったのかもしれない。
(注) 朝鮮半島の各種土器の特色
*『古代日本と百済』及び『日本出土の
舶載 陶磁』(2000)より抽出

馬韓土器・集団AⅠ両耳付壺、鋸齒
紋土器、二重口縁土器
馬韓土器・集団BⅡ鳥足紋土器、平
底有孔広口土器
百済土器Ⅱ三足杯、平底壺、蓋杯、
広口壺、獸脚碗
新羅土器Ⅱ印花紋土器、長頸壺
大伽耶土器Ⅱ黒色物質の噴き出し、
三角形透窓、脚部形態

本書が検証した結果と日本書紀及び中
国、朝鮮半島に残る各史書の記述との整
合について考えてみます。

まず、有名な『魏志倭人伝』を含む『三
国志魏書東夷伝』の記述との整合性です。
『二国志魏書東夷伝』は、三世紀前半の
朝鮮半島の状況を記述しています。ここ

では高句麗(*次に東沃沮などの記述が
続きますが省略します)、楽浪郡、帯方郡
の記述の後、韓の記述が続き馬韓、弁韓、
辰韓の三つの種族があると記述しています。
新羅、百済の記述は見られません。韓の
記述の大半は馬韓の記述に充てられてい
ます。馬韓の中には五十余国があるとさ
れています。馬韓に関する記述の中に、
箕子朝鮮の子孫である朝鮮侯の話や、燕
齊、趙の地からの人の流入の話や、燕
に楽浪郡からの人の流入の話が見られま
す。これらの中国と馬韓の交流記事は、
馬韓に中国文化の影響を受けた独自の文
化が存在した背景であると考えられます。
次に『宋書東夷伝』です。『宋書東夷伝』
は五世紀中ごろの朝鮮半島の状況を記述
していますが、ここには高句麗、百済、
倭国の三か国の記述しかなく、南朝に朝
貢してきた国の記載のみで、朝鮮半島全
体の記述ではないと思われます。百済に
は「都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王」
等の称号を与えています。百済に朝鮮
半島全体の支配権を与えているとは思わ
れません。一方倭国には「都督倭新羅任
那加羅秦韓慕韓六國諸軍事、安東大將軍、
倭王」という称号を与えており、倭王が
『三國志魏書東夷伝』にいう韓の地全体
の支配権を主張した跡が見られます。こ
の時点で馬韓(*宋書には慕韓と記述さ
れています)、慕韓は馬韓と同義である
と考えます)が存在していたとする「検
証結果」とは一致します。

次に『好太王碑文』です。『好太王碑文』
は四世紀末から五世紀初の朝鮮半島の状
況を記述しています。そこには百済、新
羅、倭、任那、加羅、安羅の記述しか
なく馬韓は現れません。明らかに「検証結
果」とは矛盾します。そして倭は帯方地
域に侵入したという記述もあります。「検
証結果」を正しいと考えた場合、好太王
碑文に記された倭は馬韓勢力を意味して
いる可能性が高いと思われます。当時の
実態としては、馬韓勢力と倭が親密な関
係にあり、高句麗は侵略の主体となった
馬韓勢力を無視して、馬韓勢力と行動を
共にした倭人をごとさら強調したのでは
ないでしょうか。

特に栄山江流域(韓国全羅南道の光州
や羅州を中心とした地域)には、五世紀
中葉から六世紀中葉まで北部九州様式の
前方後円墳(韓国では長鼓墳(チャンゴ
ブン)と呼ぶ)が築造され、その中に紀
元前から栄山江流域で使われていた甕棺
が収められており、倭国(北九州勢力)
と馬韓勢力の融合が見られます。これは、
五世紀初の馬韓勢力と倭との親密な関係
の発展形態であると考えられます。

百済、馬韓と倭国との関係について考
えてみます。

まず、平安初期に編纂された『新撰姓
氏録』に出自を「漢」として記載された
諸氏族の出自についてです。『新撰姓氏録』
に、出自を「漢」と分類された氏族は百
六十三氏あり、「諸蕃」に分類された三百

二十六氏の半分を占めます。「諸蕃」の他
は「百済」百四氏、「高麗」四十一氏、「新
羅」九氏、「任那」九氏です。この「漢」
出自の氏族の主体をなす東漢氏の始祖・
阿知使主、西漢氏の始祖・王仁、秦氏の
始祖・弓月君は、いずれも応神期に百済
から来たと日本書紀に記されています。
応神期の記述ということは、百二十年の
ずれを加味すると五世紀の出来事であり、
彼らが渡来した時期と土器の出土状況か
らみて、馬韓地域から来た氏族であると
考えるのが妥当です。そして馬韓地域か
ら来た氏族は、いずれも中国に出自を持
つと自称していたのではないでしょう
か。五世紀には、中国に出自をもつ馬韓地域
の氏族が倭国に渡来したのち、一部は北
九州に住み着き、一部は近畿地方に新し
い居住地(フロンティア)を求めていっ
たという史実があったことが推測できま
す。

次に『日本書紀・継体紀』に記された
任那四県の割譲記事についてです。『日本
書紀』の朝鮮半島の記述のうち六世紀初
頭までの記述に現れる百済は馬韓のこと
であり、対応する倭国は九州王朝であっ
たことが推定できます。問題は、馬韓(栄
山江流域)勢力が百済に飲み込まれたと
する六世紀初頭、すなわち『日本書紀』
が任那四県の百済への割譲と記した事件
(五一二年)の真相です。私は「隠され
た歴史(70)」において前期九州王朝(倭
の五王から磐井に続く王朝)から継体王

朝への王朝交代によって、前期九州王朝と友好関係をもって任那が離反し、やがて新羅、百済に飲み込まれていったという仮説を提起しました。当時の私は、任那四県（采山江流域）は日本書紀の記すように任那の領域であったと考えていました。しかし今回の馬韓に関する検証結果に照らし合わせてみると、まさしく采山江流域の馬韓勢力が百済に吸収されたのは、馬韓勢力と親密な関係をもっていた倭国（前期九州王朝）が滅亡し、百済と親密な関係を結んでいた（または結ぼうとしていた）継体王朝が、百済による馬韓（采山江流域）の吸収を後押しした結果に他ならないと考えられます。

六世紀の北部九州の朝鮮半島土器の集中について考えてみます。五世紀には朝鮮土器が北部九州、和泉、河内など西日本各地で見られたにも拘わらず、六世紀には、北部九州という非常に限られた地域にだけ、群集墳の副葬品として集団Bの鳥足紋土器が出土するのはなぜでしょうか。私は、継体・安閑に続く宣化が朝鮮半島への窓口として那津官家を建造した結果であると考えます。しかし、『日本書紀』が記すように宣化の後近畿大和にいる欽明が王朝を継いだのであれば、那津官家に運ばれた朝鮮土器は、王権の中心である大和に運ばれ、大和でも一定数の朝鮮土器が見つからなければおかしいです。

私は宣化の嫡男が那津官家に遷都し、

後期九州王朝を立ち上げたという仮説を立てています。この場合、那津官家が、継体によって統一された倭国全体の朝鮮半島への窓口となるとともに王権もここに存在します。この場合にはじめて、九州が独占的に馬韓からの工人を受け入れ、北九州に朝鮮土器が集中するという状態が生まれたと想定できるのではないのでしょうか。

俳句

影山 武司

尾根伝ふ道の一筋青岬
離島へと出航のベル南吹く
追分の標の古び夏の草
麻暖簾箱階段の黒光り
青蘆や空に鳥声吸ひ込まれ
虎尾草の尻尾を風のくすぐりぬ
白靴のホップステップジャンプかな
滝風の道を九十九に折れゆけり
鑑真忌半紙広ぐる文机
大の字に風の声聴く夏座敷

編集後記

SK生

▲あと十日ほどで参議院選挙である。与党が過半数の議席数を維持できるかどうか注目が集まっている。国政選挙に熱気がかもつてくることは慶すべきことである。▲多くの選挙報道を見聞きしていると聞きなれない言葉が頻繁にでてくるようになった。たとえば「日本人ファースト」。これを主張している某政党の党首は「日本のトランプ」と言われているらしい。間違っただけではない。トランプ氏は「アメリカ・ファースト」とはいつているが、「アメリカ人ファースト」とは言っていない。ケチをつける気はないが、そもそも「日本人ファースト」の「日本人」とはいったいどのような人々を指すのか。日本国に税金を納めている人たちか。それなら外国から来た人たちの中にも多くの日本人がいる。日本に住む人々の間に今以上の分断・差別をもちこんでどうするのだろうか。▲やはり、というか予想通り海外から来た人々を排斥するようなフェイクニュースが出てきた。いわく「生活保護受給者の3分の1は外国人だ」とか、「日本人の給料が上がらないのは日本人から仕事を奪い低賃金で働く外国人がいるからだ」とか、である。いずれもデマであり、悪質なウソである。厚労省によれば生活保護を受給する外国人は3%にも満たない。また、外国人が働くのは日本人がやりたがらない職種で働くのがほとんどだ。彼らは日本人の仕事を

奪つてもいないし、給料で競合することも無い。そもそも日本人の給料が低いのは日本の政治と企業の経営のあり方の問題である。よくよく考えてみれば政策的にも法的にも一般の外国人を優遇しようとするものはほとんど皆無である。いまさら言うまでもなく日本は今も昔も「日本人ファースト」の国だったのだ。▲かつて「諸悪の根源、日本国憲法」と人々に訴えてきた民族派団体「一水会」創始者である鈴木邦男さんは、後に基本的人権の尊重という観点から現憲法を高く評価するようになったが、自分が唱えるスローガンの裏付けとなるデータも事実もないままに「人々を動員する時、あれこれ言うより『こいつが敵だ!』と断定的にいった方が成功する」とかつて思っていたと自著で述べている。思えば鈴木氏が「成功する」と述べた方法は昔ナチスが政権を取ったときと同じである。▲日本社会の問題を「すべて外国人が悪い! 外国人は敵だ」としても今の我々が直面している問題の解決にはなりそうにもない。国民の多くが熱狂に踊ることなく冷静な判断を持って自分たちの未来を託す代表を選ぶことを願っている。

八月には八月の意味がある

○八月には八月の意味がある。その意味を問う季節がまた巡って来た。最近、こんな句に出会った。

世の中に鋼の意志で平和問う 和幸

戦後八十年、天皇后両陛下は戦没者慰霊と記憶継承のため硫黄島(四月)と沖繩(六月)を訪問。旅はさらに、広島(六月)から長崎(九月)へと続く。平和に勝る宝物はないとの思いを共有したい一句。

未帰還の命緑の大地生む 修一

先の大戦で戦死した兵や戦禍に没した人々の遺骨のうち、いまだにどれだけの遺骨が野に山に海に放置されたままか。未帰還の命を抱いた大地はこんなにも緑におおわれていると、戦後八十年に思いを致す句。

関連して、加古 陽「夜明けのニュースデスク」にこんな短歌があるという。ピアク島で取材したときの歌。

肉体でありしは二十四、五年か
以後七十年白骨のまま

死してなお解かれぬ軍命この兵も
永く土中に気をつけをして

さて、昭和二年(一九二七)頃に井

上剣花坊の門をたたいた鶴 彬(つるあきら) という石川県生まれの人がいた(一九〇九〜一九三八)。反戦の意志を貫き、昭和の初期を駆け抜けた川柳人で、こんな代表作を残している。背景となった時代と共に記す。

・関東大震災・朝鮮人虐殺

燐寸の棒の燃焼にも似た生命

(一九二四年、十五歳)

・治安維持法

暴風と海との恋を見ましたか

(一九二五年、十六歳)

退けば飢ゆるばかりなり前へ出る

(一九二八年、十九歳)

・満州事変／小林多喜二虐殺

ふるさととは病ひと一しよに帰ると

こ

(一九三五年、二十六歳)

銃剣で奪った美田の移民村

(一九三五年、二十六歳)

・2・26事件

吸ひに行く姉を殺した綿くずを

(以下一九三六年、二十七歳)

ざん壕で読む妹を売る手紙

暁を抱いて闇にゐる蕾

枯れ芝よ！団結をして春を待つ

ヨボと辱められて怒りこみ上げる
朝鮮語となる

・日中戦争

蟻食ひを噛み殺したまま死んだ蟻

(以下一九三七年、二十八歳)

タマ除けを産めよ殖やせよ勲章を
やらう

高粱の実りへ戦車と靴の鉾

屍のぬないニュース映画で勇まし

い

出征の門標があつてがらんどうの

小店

万歳とあげて行つた手を

大陸においてきた

手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動き知るころ骨がつき

・国家総動員法／鶴彬獄死

・アジア・太平洋戦争

・アジア・太平洋戦争

確とした平和が求められる。

○岡本文弥「句集 汗駄句々々」(三月書房、一九八九年)にこんな俳句があった。

あめりかという国嫌い原爆忌
秋風や核ということ聞くと厭

この秋や新聞テレビ発狂す
(忘れまいぞえ昭和六十三年)

去年今年貧こそ平和無事息災

岡本文弥(おかもと ぶんや、本名・井上猛一、一八九五年(明治二十八年)一月一日、一九九六年(平成八年)十月六日)は、日本の新内節の太夫、新内節岡本派五代目家元、新内節研究家、随筆家、俳人。

また、藤原龍一郎「暴君と独裁者笑む寒き春」28首(「短歌」5月号)にあるという歌。

「平凡」の付録の歌本あの頃は
歌いき「フランシーヌの場合」

お台場のスクランブルが一瞬で
瓦礫の原に見えるまばたき

まばたきの間にも変わつてしまう世界。
いろいろな思いが胸をよぎる。

考える葦だやめようバカなフリ
折り鶴に飛ぶ時が来た平和賞
回れ右すれば始まるけもの道
猛暑の中であれこれ思いながら、汗駄句駄句の夏である。